

平成 30 年 2 月 27 日
仙台管区気象台
福島地方気象台

吾妻山の噴火警戒レベルの「警戒が必要な範囲」について

- ・ 吾妻山火山噴火緊急減災対策砂防計画（平成 25 年策定）によると、直接的な被害が火口周辺にとどまる小規模な噴火（水蒸気噴火）として、1950 年の噴火（噴石が火口から 1.2km まで到達）を対象としている（図 2 参照）
- ・ 御嶽山の 2014 年 9 月の水蒸気噴火の例のように、他火山でも小規模な噴火でも噴石が 1km 以上飛散する事例がある（参考 1 参照）。
- ・ 以上のことから、吾妻山で小規模な水蒸気噴火が想定された場合には、1950 年の噴石の飛散範囲に余裕を持たせた「1.5km」とするのが望ましい（図 1 参照）
- ・ なお、噴火警戒レベルを導入している他の火山では、多くの場合、噴火の可能性が高まった場合、1～2km の警戒を必要としている（参考 2 参照）

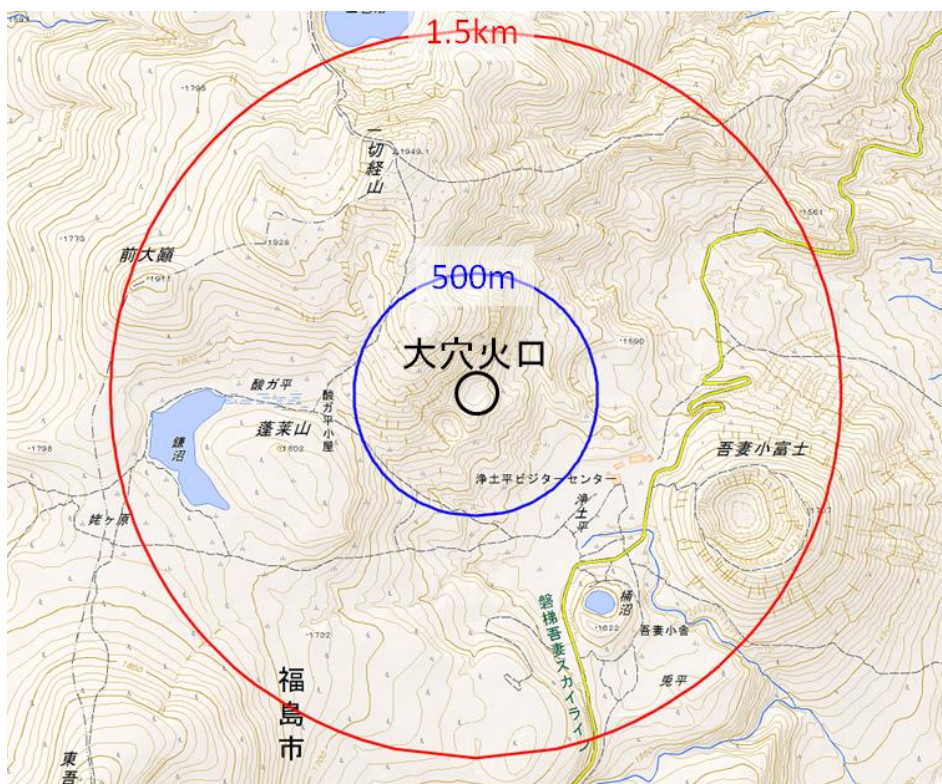


図 1 大穴火口の周辺地図

(参考1)

○ 観測事例 (噴石の飛散範囲 1km 以上) (日本活火山総覧 (第4版) 等による)

吾妻山 : 1.2km (1950年)、1.5km (1893年)

雌阿寒岳 : 1~2km (1959年8月、1956年5~6月)

北海道駒ヶ岳 : 山頂火口原内に大きな噴石が飛散

1929年6月17日00時30分頃 : 最初の小噴火→直後大噴火のため不明

2000年9月~11月 : 小噴火→人頭大が700m、900m

1998年10月25日 : 小噴火→不明

1996年3月5日 : 小噴火→不明

新潟焼山 : 火口から1km程度 (1974年)

焼岳 : 火口から1kmまで (1962年)、2kmまで (1915年)

御嶽山 : 1.3km (2014年)、火砕流あり

白山 : 2km以内 (1042年噴火)

阿蘇山 :

1979年9月 : 噴石が第一火口から約1.2kmまで飛散

1958年6月 : 噴石が第一火口から約1.3kmまで飛散

1933年2月 : 噴石が第二火口から約1.2kmまで飛散

霧島山 (新燃岳) : 1~2km (1959年2月)

霧島山 (御鉢) : 1900年2月16日 : 約1.8km、1895年10月 : 約2kmまで

口永良部島 :

1968年12月~1969年3月 : 噴石飛散

1945年11月、1933年12月 : 新岳で割れ目噴火、火口から約1.9kmまで噴石飛散

(参考2)

○ 水蒸気噴火の警戒が必要な範囲 (大きな噴石)

日光白根山 : 山頂から概ね半径 2km 以内 (レベル2)

→ 過去の噴火での実績が不明なので、ここでは他の火山の事例を参考に、大きな噴石の飛散範囲を山頂から概ね半径 2km とした

草津白根山 : 火口から半径約 1km (小規模の場合 (レベル2)、中規模は 2km (レベル3))

→ 2018 年の水蒸気噴火では、噴石は火口から半径約 1km を越える範囲に飛散

御嶽山 : 想定火口域から 2km 以内 (レベル2は 1km 以内)

→ 1979 年、2014 年は小規模で 2km 以内 (レベル3) (2014 年は 1.3km、火砕流あり)、1991 年、2007 年はごく小規模で 1km 以内

阿蘇山 : 火口から概ね 1km 以内 (小規模噴火) (レベル2)

→ 1930 年代以降では、大きな噴石や火砕流 (火砕サージ) は、最遠で約 1.5km まで達している。(レベル3)

鶴見岳・伽藍岳 : 概ね 1km 以内 (小噴火)

→ 居住地域が 1.5km にあるため、レベル2で 1km、レベル3で 1.5km 以内としている。

霧島山 (えびの高原) : 概ね 1km 以内 (ごく小規模) (レベル2)

→ 水蒸気噴火は 2km 以内 (小規模) までを想定。